

です。いつか仕事する体感ではないです。

物を捨てるには我を捨てる事でもあるように2021.5.1~5.7

今週の

倫理

5月のテーマ | 捨我得全

1227号

幸せ運ぶアホ鳥

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこぼれを掲載いたします。

以前岡田紅陽先生の遺作展にのぞんだ時のことである。岡田先生は富士を撮っては日本一いや世界一の写真家で、富士に教育施設をもつ私たちのとくに追慕してやまない方である。

その目のさめるようなすばらしい遺作の数々をつぶさに見ていると、時のたつのを忘れる。またその写真集『富士』（求龍堂）を求め帰って眺めていると、自ずから感激の湧き出て久しく醒めることを知らない。山に伏し、寒さと闘いながら苦心に苦心を重ねつつ生涯を富士の撮影にかけた紅陽先生は「秒に秘めた生命」と題して、次のように書いている。

「会心作のない中でも、いくらかよいのがあるとするれば、それはかつて飛行機で撮影中、とつぜんエンジンが故障して、プロペラがとまってしまった。そのとき、もうだめだと観念して、どうせ死ぬのなら、ともかくにも写すのだと、夢中でカメラのシャッターを切った。飛行機はパイロットの必死の操作で、風に乗れ、ようやく奇蹟的にも湘南の砂浜まで行って着陸することができたのだが、このとき写したのが、いくらかよくできていた。死ぬと覚悟をきめたので、何にも雑念のない、無の心になれたためである。」



執着心を捨てた時

丸山竹秋

その道に打ち込んだ人の、こうした言葉は尊いと思う。だがこれは、もちろんな写真撮影に限らず、人生のすべてについていえることで、自己への執着というか、他へのわだかまりというか、そうしたものを捨てた時が、その人の個性がもっとも発揮され、美しく輝く時だと信ずる。

人間における美しさとは、やはりその人の心にあるのであって、その心からにじみでた行ないに現われるのではなからうか。その心の美しさとは、いわゆる自分だけの我欲を捨てて、他のために尽くそうとするところにもっとも輝くのではないか。

捨てることは、簡単にいうと、わがままから離れることだ。これはたやすくできる時もあるが、なかなか難しい時もある。

科学的研究にしても、政治上、事業上のことにおいても、また家庭の仕事、学業についても、すべてを捨ててかかるといふことは、なかなか難しい。しかしそれでは全くだせないかという、そうではない。行き詰まったあげく、すべて財産をなげうって自己を捨てた時に、起死回生の妙手をおいづいた事例も多い。

ある瞬間、それはたとえきわめて短い時間であっても、自分のわがまま、私利私欲などを捨て得る時というのは現実にある。なかなか自己のわがままは捨て得ないかもしれないが、日に少しでも捨てていこうと心がける。それが「日にひとつ、よいことを」の実践になる。

〔選集〕より